

Tokyo Metropolitan Theatre 2022 REPORT

多文化共生と
アートに関するリサーチ(国内)
2022 レポート



東京芸術劇場



「東京と変身」他
影絵掌編

活動概要

東京芸術劇場（以下、芸劇）における「多文化共生に向けたアートプログラム」は、人材育成・教育普及事業の一環として、2021年度より「シアターコーディネーター養成講座《多文化共生・基礎編》」や公開講座「アーティストの視点から多文化社会を捉える」を行うなど、本格的に取り組みを始めました。

「誰もが芸術文化に触れられる共生社会の実現に貢献する」ことをミッションとしている芸劇は、劇場が所在する豊島区で暮らす多くの外国人住民に目を向け、2022年度は今までつながりを持つことがなかったコミュニティとの協働について模索しました。東京の今を生きる19カ国・計60名の外国人住民に取材した影絵のプロジェクトに携わった経験を持つキュレーター宮本武典さんと影絵師の川村亘平齋さんを招聘し、さらに、上記養成講座から有志のリサーチメンバーを募り、影絵を軸に据えた「多文化共生とアートに関するリサーチ」を1年間、継続的に行いました。本レポートは、研究者の楊淳婷さんに参与観察を依頼し、アートによる取り組みを解析・考察して頂きました。

今年度連携した3つの団体「メロス言語学院」、「インターナショナルイスラミーヤスクール大塚」と「NPO法人Mother's Tree Japan」から影絵の活動に参加した人々は、留学生の若者、ムスリムの子供も、子育て世代の外国人女性など、いずれもエネルギーで今後も一構成員として多様化が進む日本社会と共に歩んでいく、そのようなポテンシャルを持つ方々です。

連携先の団体と共に《東京と変身 他、影絵掌編》と題した3つの活動を実現しました。宮本さんによると、「掌編」とは短編小説より短い読み物で、豊島区とその周辺にある小さなストーリーの集まりというイメージを伝えています。新型コロナウイルス感染症が収束しつつもまだ油断できない状況の中で、本事業は、影絵というパフォーマンスアーツを通して外国人住民と劇場がつながる接点を生み出したのはもちろん、一般観客に向けた公演は外国人住民の抱える様々な思いを発信する場にもなりました。

多文化社会において劇場はどうあるべきでしょうか。アートはいかにして多文化共生を促進できるのでしょうか。これらについて考えながら取り組んだりリサーチ活動の一端を、本レポートにて紹介します。

目次

- 01 活動概要
- 02 プロジェクトの流れ
 - 活動の様子
- 05 一 掌編 1 — 「ニュー・トーキョー・アラベスク」
- 08 [協力団体の声] 池田 奈緒子（大塚インターナショナル・イスラミーヤ・スクール (IISO)）
- 11 一 掌編 2 — 「東京と変身」
- 15 [参加者の声]
- 16 [協力団体の声] 香川 陽子（学校法人香川学園メロス言語学院）
- 19 一 掌編 3 — 「わたしのこもりうた」
- 24 [協力団体の声] 坪野谷 知美（NPO法人 Mother's Tree Japan）
- 27 続・掌編 舞台裏のつぶやき

プロジェクトの流れ

2021
年度

2022.
1/25 (水)

「東京に住む外国人の声と影」トーク&パフォーマンス

場所：東京芸術劇場シンフォニースペース
多文化共生×東京芸術劇場 公開レクチャーシリーズ「アーティストの視点から多文化社会を捉える」全3回の内、第2回

2022
年度

「多文化共生とアートに関するリサーチ」始動

5/18 (水)

リサーチメンバー向けガイダンス

- リサーチメンバーとプロジェクトのミッションを確認しながら、本事業の企画・構成の宮本武典さんは豊島区内の「 masjid 大塚」と「メロス言語学院」と連携することを提案した。
- 影絵師・川村亘平齋さんの指導のもと、リサーチメンバーは影絵人形を作成し、即興的な表現を通じて自己紹介を行った。

6/22 (水)

企画会議

- 宮本さんが masjid 大塚など豊島区の多文化共生と関連した施設、団体やコミュニティに取材した内容をリサーチメンバーに共有した。
- 本プロジェクトを通して連携したい豊島区内の〈場／人／活動／団体〉について、リサーチメンバーが独自に行ったりリサーチの結果が発表された。メンバーの一員で中国出身の王皎令さん(齋藤里咲さん、小山彩花さんも提案)は、外国人女性の妊娠、出産、産後、育児などの困難に対してサポートする「NPO法人Mother's Tree Japan(以下、マザーズ・ツリー)」との連携を提案した。

7/20 (水)

masjid 大塚の訪問

- 日本イスラーム文化センター(以下、JIT)が運営する masjid 大塚を訪問し、JIT事務局長のクレイシさんと事務局の中村さんから masjid 大塚の成立と現在や、イスラーム文化の基礎知識などについて紹介してもらった。また、JITが大塚に設立した教育施設インターナショナルイスラームイマースクール大塚(以下、IISO)ではムスリムの子どもに向けて多言語の授業や部活を行っているということなど、ムスリムの子どもの学習環境についてお話ししてもらった。
- リサーチメンバーは masjid 大塚の礼拝所で礼拝の体験をした。

8/3 (水)

企画会議

- リサーチメンバーが6月に発表した複数の企画案を検討し、東京芸術劇場がそれらの提案先と連携する意義について話し合った。

8/24 (水)

企画会議

- マザーズ・ツリーがIISOとメロス言語学院に続く3つ目の連携先として決まり、メンバーはそれぞれの企画についてディスカッションした。

9/14 (水)

メロス言語学院での説明会&参加者募集

- 宮本さんと川村さんによるプロジェクトの説明会を留学生に向けて行った。

9/21 (水)

イスラーム国際学校IISOの訪問、企画会議

- IISOの副校長アフラさん、先生やボランティアの方に学校や子どもたちの状況について共有してもらい、ワークショップの実施にあたって注意すべきことを確認した。

10/19 (水)

企画会議&活動の準備

10/20 (木) -
11/5 (土)

マザーズ・ツリー関係者へのインタビュー

10/26 (水)

「ニュー・トーキョー・アラベスク」ワークショップの実施

@南大塚地域文化創造館

- IISOの子どもたちと植物をテーマにした影絵のモチーフを制作し、即興発表会を実施した。

10/29 (土)、
30 (日)

「東京と変身」ワークショップ&公開発表会の実施

@東京芸術劇場シンフォニースペース

- 東京のイメージについてのディスカッションを経て、メロス言語学院の留学生たちは自身が変身した姿を表す影絵人形を制作し、メロスの関係者と一般の観客の前でパフォーマンスを行った。

11/23 (水)

企画会議&活動の準備

11/26 (土)

「ニュー・トーキョー・アラベスク」成果物展示

@ IISO

- IISOにて、「ニュー・トーキョー・アラベスク」で作られた影絵のモチーフが展示され、ワークショップの様子を収めたダイジェスト映像が上映された。

12/3 (土)

企画会議&活動の準備

12/21 (水)

活動の準備

2023.
1/6 (金)

活動の準備

1/7 (土)

「わたしのこもりうた」公演の実施

@東京芸術劇場シンフォニースペース

- マザーズ・ツリーのボランティアスタッフで、日本での出産・育児の経験を持つ4人の外国人女性の語りが影絵を通じて上演された。



一掌編1-「ニュー・トーキョー・アラベスク」 インターナショナルイスラミーヤスクール大塚の 児童による影遊び

都電荒川線（東京さくらトラム）が通る大塚。線路沿いにきれいなバラが咲き誇っていた。晴れ渡る青い空と暖かい晩秋の日差し、今日の活動にぴったりの天気だ。会場の周辺には公園とたくさんの植木鉢があり、制服を纏う子どもたちが植物を囲んでヒソヒソなにか話していた。近寄って手元を覗くと、鉛筆で白い紙に植物のアウトラインを描いていた。どこことなく必死さが伝わってきていた。

インターナショナルイスラミーヤスクール大塚（以下、IISO）は多国籍、多言語のムスリムの子供が通う国際学校*1であり、主に英語で授業が行われ、日本語やアラビア語を習得することもできる。小学校1年生から4年生はアートの授業で図工の作業をすることがあるが、5年生からは授業でアートに触れることがなくなる。今回のワークショップは小学校4年生から中学校1年生の子どもたちに影絵モチーフの制作とパフォーマンスを体験してもらう機会となった。イスラームの教えで偶像崇拜がタブー視されていることを踏まえて、植物をテーマに表現してもらうことになった。この日、子どもたちは草木、お花やサボテンなどに目が釘づけになっていた。

野外でのスケッチがひと段落すると、室内で影絵モチーフの制作がはじまった。分厚い黒ボール紙にスケッチした模様を書き写し、その形をハサミで切り取って、ところどころ穴あけて柄をつける細かな作業に子どもたちは没頭していた。時には川村亘平齋さんの周りに子どもたちが集まり、あーだこーだにぎやかそうに制作方法について質問していた。気がつくと、副校長のアフラさんや先生たちも現場の熱気に巻き込まれて影絵のモチーフを作っていた。

作られた影絵モチーフをみんなで鑑賞するよう、即興的な発表会が行われた。人前に立つことで恥ずかしそうにしていた子どもも、光加減で自在に拡大したり縮小したりする影絵に興奮を隠せず、川村さんのインストラクションに合わせて影遊びをしていた。最後は、子どもたちが作ったモチーフに一齐に光を当てて影絵の森をつくった。それはアラベスクに似た華麗な装飾模様にも見えた。

ところで、多言語の子どもたちに向けて行うワークショップだったが、影絵の説明や進行は日本語をメインに行い、IISOの先生が英語に訳していた。



*1 2023年現在は幼稚園、小学校、中学校にあたる学級が設けられている。

先生が訳していない場面では、日本語が不得意な子どもは近くにいる友人に通訳してもらっていた。一見言語がごちゃ混ぜになっている状況に見えるが、子どもたちからは焦りや不安を感じず、むしろ多言語環境に慣れていて、言葉の助け合いが日常で起きている様子だった。IISOで国語科(日本語)を教えているNAO先生と事務局の中村和義さんは、いずれも子どもたちが影絵に夢中になって自在に遊ぶ姿が印象的だと語った。

ワークショップから1ヶ月後の土曜日、IISOの「芸術と科学の展覧会 (Arts and Science Exhibition)」の一室で、影絵のモチーフが森に見立てられて展示され、ワークショップのダイジェスト映像が上映された。日本で言う文化祭のようなもので、この日、生徒たちの家族や兄弟姉妹が学校を訪れていた。また、ワークショップに参加していた子どもも映像を見て、友人や自分が写っている姿を嬉しそうに確認していた。

芸劇の企画で声をかけられて、初めて実現した今回のワークショップに対して、引率の先生たちは口を揃えて楽しかったと述べていた。また、今後は子どもたちに東京芸術劇場のバックステージツアーに参加させてみたいかもと、NAO先生は考えているようだった。

概要

日時：2022年10月26日(水) 13:00 - 16:30

場所：南大塚地域文化創造館

参加者：IISO 4年生～7年生 28名、引率 5名

講師：宮本武典、川村亘平齋

運営・サポート：芸劇スタッフ／研修生計 5名(田室寿見子、加藤惟、村上理恵、吉田舞雪／新井ひかる)、リサーチメンバー 2名(張藝逸、齋藤里咲)、東京藝術大学留学生 1名 (Ima Hikmatul Hasnah)

記録：志鎌康平(写真)、河内彰(映像)、楊淳婷(参与観察)

協力：インターナショナルイスラミーヤスクール大塚、マシジ大塚(日本イスラム文化センター)



《ワークショップの流れ》

- ① イントロダクション
↓
- ② 野外スケッチ
↓
- ③ 川村さんによるデモンストレーション
パフォーマンス
↓
- ④ 制作
↓
- ⑤ 影絵で森をつくる即興発表会
(学年を分けて実施)

試行錯誤しながらなんとか形にしていく姿に頼もしさを感じました。

池田 奈緒子 NAOさん

インターナショナルイスラミーヤスクール大塚 (IISO)

今回は、「影絵」を通して大変貴重な機会を生徒たちにくださり、本当に感謝をしております。

いちから、自分自身で選んだものを観察し、描き、そして作品にするという経験は初めての生徒たちがほとんどでした。芸術家の先生の作品をじかで感じることができたのも、彼らの人生においてとても貴重な体験となりました。

まず、何を描くのかというところで時間がかかり、この時点ですでに頭をかなり使って考えるということを経験させていただきました。東京芸術劇場のスタッフの方々が一人一人について声をかけ、親身にサポートをしてくださり、彼らのまとまりのなかった案がどんどん形になっていくのは、そばから見ていて本当に感動いたしました。

次に、実際に形にしていく、という作業にうつりますが、簡単そうに見えるのに、実際おこなうのは、大変難しく労力も半端ないということに生徒たちは気付きます。自分の想像とのギャップに心が折れそうになりながらも、試行錯

誤しながらなんとか形にしていく姿に頼もしさを感じました。

最後に、生徒の作品は、スタッフの方々により命を吹き込まれ、生き生きと動き始めます。ただの紙で自分の想像したように切り取ることができずに、自分の作品をあまりよく思っていなかった生徒も、アーティストのスクリーンでの指示によって、自分の作品に命があることに気づき、作品に対して愛着がわき、大切に、愛おしさを感じている姿をみて、彼らの成長を感じました。私も彼らの命を吹き込まれた作品のビデオを何回も繰り返しみて、心を満たしております。

THE ART EXHIBITION のシアタールーム企画では、何度も何度も見に来る生徒、同じように作成したくてたまらない生徒、高度な作品に驚くご両親など、大盛況でした。

これからも、生徒たちに素晴らしい経験となる企画をしていただけたら嬉しいです。

本当にありがとうございました。





一掌編2-「東京と変身」 日本語を学ぶ若者たちのポートレート

「何人来るのかな」会場では、朝から心配の声が漏れていた。先月、メロス言語学院に足を運んでワークショップの参加者を募った。多数の応募を受け付けたが、当日に来てくれるのか不安があったのは否めなかった。

定時前、ぼつぼつと参加者が現れた。入口の卓上に並べてある精巧な影絵人形を眺めながら少しずつ雑談が始まった。

「この影絵はだれが作ったんですか」

「僕の先生。これはインドの神話『マハーバーラタ』のキャラクターと僕がつくったコメディアンの猿。西遊記みたいな」

「へー」

先着組が川村亘平齋さんによる神々の話を興味深く聞いている中、来場者がどんどん増え、いよいよワークショップがスタート。

メロス言語学院の香川陽子先生によると、6、7割の在學生は美術系の学校への進学を志望していて、平面やファインアーツの志望者が多い。今回のワークショップ参加者もそのような学生が多く、半数以上が大学院への進学を目指しているのだという。確かに、日本語レベルは初級から上級までかなりばらつきがあったが、後述するように、制作への関心はいずれも高い熱量を持っているように見受けられた。

さて、参加者とスタッフがお互い知り合えるよう、体を動かしながら自己紹介をするアイスブレイクのゲームが最初に行われた。誕生日順に並んだり、夕食を食べた時間順に並んだり、グループで並ぶ速さを競うゲームが徐々に白熱し、会場はどんどんざわついていった。「夕食は何を食べましたか」や「自分で作りましたか」など、ゲームのお題にちなんだ質問が投げかけられ、「コンビニ弁当を買って食べた」や「チャーハンを作った」など、一人ひとりの暮らしぶりが垣間見える時間になった。

次に、企画についての説明がされた。企画・構成の宮本武典さんはスライドで写真を見せながら、今年度3本立ての企画を丁寧に説明した。そして、川村さんが影絵で演じる定番キャラクターの「猿のニシオカ」が登場した。ニシオカが魅せる影絵のデモンストレーションでは、リサーチメンバーの柏木俊彦さんと王岐令さんが自作の影絵人形^{*1}に変身する

^{*1} 2022年5月18日(水)のガイダンスにて、リサーチメンバーが作成した影絵人形がこのデモンストレーションで登場した。

パフォーマンスを披露した。

初日の午後、おしゃべりタイムが設けられた。学生たちは部屋の中央に設置された白い大きなスクリーンの両側に分かれて、片方2つずつ、計4つのグループでディスカッションを進めた。各グループには2名のスタッフが入ってファシリテーター^{*2}の役割を担った。話し合いのテーマは事前に参加者にメールで送信されており、『『東京』について、みんなに聞いてみたいこと』を、学生たちはすらすらと紙に書いた。紙は折り畳まれてケースに集められた。この質問用紙をランダムに引いて話していくスタイルだ。〈東京の電車〉、〈東京のファッション〉、〈東京の人〉、〈東京の街〉、〈東京の食べ物〉、〈東京の暮らし〉など、それぞれが生活で気になっていたことを確認し合っていた。〈ブロックのない改札口〉、〈人との距離感〉、〈モノクロのサラリーマンとカラフルな原宿系ギャル〉、〈案外残っている古い街並み〉、〈ファミマのチキン〉、〈うっかり忘れる表記外の消費税〉など、日常での小さな気づきがこの場ではイメージを膨らませる大きな素材となっていた。

おしゃべりの後は影絵人形を制作する時間。しかし、ドローイングから始まる人もいれば、何かコンセプトのような文字を書き続けることから始まる人もいた。また、サイズを的確に表す展開図面を描いていた人も。この日の後半と翌日の午前中、学生たちはしばらく悩みながら、溢れ出るさまざまなアイデアをアウトプットする作業に打ち込んでいた。

ワークショップ2日目の午後、リハーサルを経て公開発表会。メロス言語学院の先生や学生、多文化共生に関心を持つ一般の観客などが白いスクリーンの両側の客席を埋めつくした。スクリーンの両方から1人ずつ登場し、スクリーンに映る影を通じて出会い、変身し、変身した姿で猿のニシオカと会話し、元の姿に戻って退場する、という形式の演出だった。宮本さんによると、猿のニシオカは「狂言回し」として学生たちの変身した姿を理解する手助けをする存在で、「これはなんだ」や「なぜこんな形なんだ」といった質問を次から次へと振っていた。

ここで、「東京と変身」で語られたストーリーを2つ紹介したい^{*3}。

「これは、やさしい顔つきの心臓。東京に来てから、入試を準備するために多くのことを学ばなければなりません。ときどき『疲れたー』と感じます。夜更かしをしたりして。強い心臓が欲しいです。心臓の血管からはタビオカを送り出しています。私は来年入試を受けますが、今年受験する友達はみんな大変そうで、とても疲れています。彼らにエネルギーをあげたい。タビオカは、エネルギーです。」

「これは一見、魚の群れですね。魚の群れは人、みんな、社会、他の人、私以外の人です。その隅っこで私は一匹の魚として社会を観察

^{*2} リサーチメンバーの王さんと張さんは中国語が話せる良き相談役兼通訳として大きな役割を話していた。

^{*3} 本人の語りに基づいて筆者が編集したもの。

して、その中に混ざりたいと思っていました。でも混ざり合うと、どんどん、自分を見失っちゃいそうな気持ちが芽生えて、結局そこから抜け出したの。これからは自分らしく生きようっていう気持ちを表したい。実は、この魚の群れは、東京の人だと思います。これは私が東京に来て感じたこと。」

日本に来て間もない留学生たちの心に潜んでいた苦悩の種。行き場のない気持ちが猿のニシオカによって引き出され、光と影が作り出す虚実が共存する空間で発露した。影として現れた変身は、普段と違うレイヤーで実在しているもう1人の自分の姿なのだ。そう思えた。

概要

日時：2022年10月29日(土)、30日(日) 11:00 - 18:00
※公演は30日の15:30 - 17:00

場所：東京芸術劇場シンフォニースペース

参加者：メロス言語学院の留学生14名、その他の留学生2名（国籍別：中国12名、台湾2名、韓国1名、インドネシア1名）

講師：宮本武典、川村亘平齋

運営・サポート：芸劇スタッフ／研修生計6名（田室寿見子、加藤惟、村上理恵、吉田舞雪／新井ひかる、小山彩花）、リサーチメンバー計7名（柏木俊彦、関根好香、王皎令、張藝逸、佐野ちあき、齋藤里咲、宍野凜々子）、その他1名（櫻井拓見）

記録：志鎌康平（写真）、河内彰（映像）、楊淨婷（参与観察）

テクニカル：東京芸術劇場 永田久美子、行方太一

協力：学校法人香川学園メロス言語学院



《ワークショップの流れ》

10月29日

- ① イントロダクション
- ↓
- ② アイスブレイク
- ↓
- ③ 川村さんによるデモンストレーションパフォーマンス
- ↓
- ④ グループトーク
- ↓
- ⑤ 制作

10月30日

- ⑥ 制作
- ↓
- ⑦ パフォーマンスのシミュレーション
- ↓
- ⑧ リハーサル
- ↓
- ⑨ 公開発表会
- ↓
- ⑩ アフタートーク

参加者の声

学校法人香川学園メロス言語学院のみなさん
参加者アンケートより

Q1.

ワークショップに参加してみて思ったこと考えたことを書いてください。

みんなのアイデアは素晴らしいですね

とても嬉しかったです。皆さんとても親切で素晴らしいです。

とってもありがたいです。いろいろな人から手伝いをもらいました。スタッフたちもずっと応援していたので、本当に感謝します。ワークショップの雰囲気が心地よいし、いろいろな人と気軽に相談しました。これは私にとって、とても貴重な機会です。そして、発表した時、皆んなの作品を見た後、他の人の視点から、新しい考えと重視していることをもらえました。もっと多く参加したいです。

大好きな教授と一緒に作品を作ったの機会は珍しいです、参加したことはわたしは本当にいっぱい感謝の気持ちがある。そんな活動は初めて参加したので、本当にいい経験になりました。スタッフさんも優しくってずっとわたしに世話して（ご迷惑をかけて本当にごめんなさい）本当にありがとうございました！

日本語学校みんなは出身がそれぞれ違う割に、コミュニケーションが楽しくできて、友達になるのも思ったより簡単でした。

本当に有意義なイベントです！参加できて本当に嬉しいです！今の日本語能力はまだ足りないが、勇気を出して参加しました。ワークショップで日本に来て5ヶ月間に会った文化の違いを真剣に振り返り、自分が何になりたいのかを考える過程で、自分の心と向き合って、自分に答えました。他人の変身人形を見るのは鏡を見るように、自分も見ました。その上、宮本さんも川村さんもスタッフさんも、みんなとても親切で、本当にこのような雰囲気が好きです！

リラックスな自己表現、いろいろな日本人と会う機会、もっと日本社会を理解できました。

影絵の面白さを初めて体験しました。

Q2.

東京芸術劇場の印象や気づいたことを自由に書いてください。

きれい

東京芸術劇場は綺麗で清潔感があり、皆さんとても優しいです。芸術活動には様々な種類があります。

環境がとってもいいところです。快適な環境で創作に集中できます。スタッフさんたちもとっても優しい、安心して交流できる環境が作りました。

とても綺麗です。以前は来たことがありません。それに学校に近いので、これからこの活動にもっと関心を持って、よく見に来ます。

環境もいいし、活動も豊かだし、いいと思います。

とても平和な印象が残りました。

自由な雰囲気を感じる！建物の外見はすごく綺麗です！

高級で、賑やかな印象でした。

机で学ぶだけではない場面や機会を、
これからも沢山提供していきたいと強く思いました。

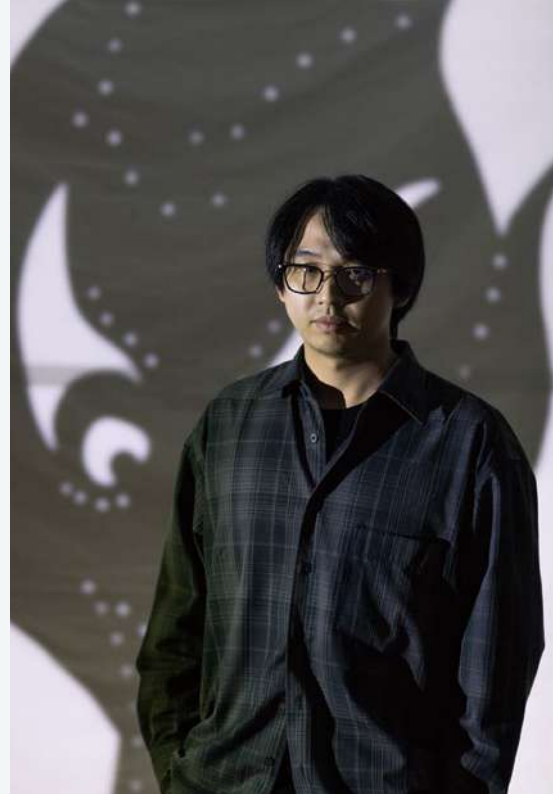
香川 陽子 さん

学校法人香川学園メロス言語学院

今回、池袋で学ぶ若い留学生の参加ということでお声がけ頂きました。2020年から待ちに待って入国を果たせた学生、10月に入国したての学生、東京で暮らしている期間も出身地も留学目標も様々な学生たちです。参加した学生のほとんどは、美術系大学・大学院への進学を目指している学生たちでしたので、日頃の日本語授業を離れ、ワークショップという形で過ごす2日間は、唯一無二の経験になったようです。

母国、家族を離れ、各々の志をもって東京で生きる彼らが、自問自答し、「変身」という新たな姿にどう投影するか、影絵でどう表現するか、奮闘する姿に心を打たれました。「こんなことを考えていたのか」と、普段接する機

会の少ない学生同士もまた刺激し合うことができたようです。自分の考えや想いを、日本語で表現する幅も一気に広がったようで、参加後の学生たちは心なしか一段も二段もステップを進み、授業でも他の課外活動でも積極性が増したように感じます。ワークショップへの参加自体、学生にとっては勇気のいる一歩だったと思います。学校としても、机で学ぶだけではない場面や機会を、これからも沢山提供していきたいと強く思いました。初めて出会う人達に囲まれ、観客の皆さんの前で発表する、このような素敵な機会に声をかけていただき、学生に代わり改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。





一掌編3-「わたしのこもりうた」 海外ルーツの母たちの声を聴く

私はユン。
東京で暮らしているミャンマー人で、
アリン・ガー・トンの母親です。

アリンは女の子だから、
育てていると、私のお母さんのことをよく思い出します。
お母さんが子どものころのミャンマーは、
女の子ならみんな、
「学校なんて行かなくていいよ」、
「家で家事をしてなさい」って、そういう時代でした。

おじいちゃんはお金もってた。
お金はあったのに、お母さんには教育を受けさせなかった。
きっと悲しかったし、悔やしかったと思う。

だからお母さん、私のことはすごく応援してくれた。

コロナ禍までのミャンマーは、とても安定していて、
経済も街も暮らしも、どんどん良くなっていました。
今はすごく不安。
アリンを連れてなんか絶対に帰れない。
何がいつ、暴発するかわからない。

クーデターが起こったのは2021年の2月。
私の出産予定日も2月でした。
それが起こるまで、私の出産計画は完璧でした。

「ミャンマーと日本を行ったり来たりして育てたいね」って、
夫とアリンの将来についていろいろ話し合ってきたけど、
もう母国での教育は難しいです。

だから私、夫婦で覚悟を決めました。
永住権もらって日本で頑張るしかない、と。

選択肢はなくなったのです。

私のいまの夢は、ミャンマーの女の子たちを、
日本から応援すること。

私が苦労したことは、みんなにさせたくない。
特にアリンには。
彼女がもし留学したいなら、お母さんが私にしてくれたように、
力いっぱい応援するよって強い気持ちがある。
私は、この国で一生懸命働いて貯金をして、
アリンを、彼女の人生に送り出す。

それまで私たちが元気に生きていたら、
2人でミャンマーに帰りたいな。 (台本より抜粋)

バダウの木とキラキラした木漏れ日。小さな女の子と大人の女性が木の下を歩いている。この日、影絵と音楽によるライブパフォーマンスのなかで、日本以外の国にルーツをもつ子育て世代の女性たちの語りが、朗読者の落ち着いた声を通して観客に届けられた。ミャンマー出身のユンさんは、娘に抱く慈愛の感情とともに母国の教育事情や政治情勢の話題にも触れ、将来の夢を語っていた。人によって他国への移住は人生の一つの選択肢に過ぎないが、留学で来日したユンさんの場合、日本での定住は安定した生活を存続させる唯一のオプションである。

ユンさんに続く3名の外国人女性の声、その一部を紹介したい。

牡丹の木の重層な影に重ねて読まれたのは、中国出身のサワさんの語り。やさしい祖父母と厳しい母親に育てられた。さわさんの母親はいつも強い口調で意見をストレートにぶつけるのだが、今や自分が娘に同じ口調で語ってしまっているのだという。その一方、さわさんの娘は日本人の旦那さんにどんどん似て、人の気持ちや場の流れを読んで振る舞い、あまり自己主張しなくなっている。さわさんは、自分だけは娘が強気でぶつかれる存在でありたいと願っている。

娘に言いたいのは、
「どんなことあっても最後にママがいるよ」ってこと。
どんなことがあっても、
この世界があなたを諦めても、
最後にちゃんとママがいる。

子守唄ですか？
私がよく歌ってあげたのは『オリオール』ですね。
小さな動物たちが可愛いの。
娘も大好きな歌です。
子どもための歌だから、
無垢で美しい世界であってほしい。 (台本より抜粋)

4歳から母親と離ればなれで暮らしていたタイ出身のレナさん。再婚を機に日本に住むようになった母親が恋しく、18歳のときに日本語学校に留学した。しかし、日本語が上達するようになったのは、日本人の旦那さんと結婚してからだった。23歳に結婚したレナさんは、現在3人の子どもを育てている。初めての出産は、自分の日本語が相手に伝わるのか不安で、病院に電話を掛けることを最後までためらっていたそうだ。

陣痛が来たとき、私、最後の最後まで電話しないで我慢しちゃったんですね。家から病院まで車で40分かかるのに。

病院に着いたときはもう子宮口が全開で、
長男は分娩室に入って2時間で生まれました。
すごく危なかった。
車のなかで産まれたらどうするの！
早く電話すればよかったのに！って、今なら思いますけど。

子どもを生んで、いちばん幸せを感じる瞬間かぁ…
そうですね、おっぱいあげているときかな。
私、赤ちゃんを見つめながら、
ゆったりとおっぱいあげています。
そのとき、「お母さんになれて、ほんとうに幸せ」って、
はじめて思えたんです。

その気持ちは… タイ語かな？ 日本語かな？
何語が出てくるんだっけ…
なんて言ったらいいだろう…
言葉にできませんね。 (台本より抜粋)

レナさんの語りを読まれるなか、3人の子どもがゴールデンシャワーの木で隠れん坊する影絵のワンシーンが印象的だった。

最後に、竹模様とともに、ベトナム出身のバンさん本人が影の姿で現れ、拍子をとるように体を揺らしながら、小さい頃によく聞いていた『おばあちゃんの唄』を披露した。

おばあちゃん、大好き
雲のように白い髪
手をつないだおばあちゃん大好き
わたしが手をつないだとき
おばあちゃんは喜んでたよ

おばあちゃん 大好き
彼女の髪は雲のように白い
手を取り合うおばあちゃん大好き
おばあちゃんの言うこと聞けば
おばあちゃんは喜ぶよ (台本より抜粋)

バンさんは3歳の時に両親と離れておばあちゃんに育てられた。日本で生まれた娘には愛情をたっぷり注ぎたいが、子育ては決して順調とは言えなかった。

子育ては私一人が抱えていて、仕事も続けたかったけど、
両立するのは難しい状況でした。
体力的にも精神的にも孤立して、つらい日々が続きました。
ベトナム人コミュニティともつながらず、
新しい子育ての知識を教えてくれたり、
相談できる友達もいなかったです。 (台本より抜粋)

夫と相談してから、現在は子育てしながら仕事を続けられているようだ。

バンさんは東日本大震災の時、ベトナムのダナンで看護の勉強をしていた学生だったが、東北の復興に役立てる人になりたいと考えた。その後、日本の老人ホームで介護士として働いていたバンさんは、今、ベトナム語の医療通訳者として技能実習生などをサポートしている。

妊娠した技能実習生の通訳はつらい仕事です。
会社は利益のために「出産しちゃダメ」とか、「出産したら帰国させる」と強く言うので、彼女たちは不安でいっぱいです。

医療通訳者は中立なので、
ベトナム人の女性として苦しい立場です。

私の通訳の技量はまだまだです。
でも続けているのは、やっぱり、やりがいを感じているから。
それはかつての私自身を助けることでもあるからです。 (台本より抜粋)

ユンさん、サワさん、レナさんとバンさん。東京の街ですれ違ったとしても、このように人生について語ってもらうことはないだろう。各々の思い出の子守唄と、彼女たちが紡ぐ母国の家族、結婚、出産や子育ての語りから浮かび上がるのは、簡単に切り捨てられない家族とのつながりと、言語的・文化的な壁を乗り越えて家族の幸せを守る強い思いなのではないだろうか。

概要

日時：2023年1月7日(土) 14:30-17:00

場所：東京芸術劇場シンフォニースペース

ストーリー提供：NPO法人Mother's Tree Japanのボランティアスタッフ4名(ミャンマー、ベトナム、中国、タイ)

企画統括・構成・取材：宮本武典

影絵と音楽・演出・出演：川村亘平齋

朗読：関根好香

ゲストミュージシャン：嶺川貴子

特別出演：ホーティエー・バン(バンさん)

アフタートーク出演：ホーティエー・バン、坪野谷友美

公演補助：宍野凜々子、松本知珠、櫻井拓見、タカミナオミ、前嶋のの

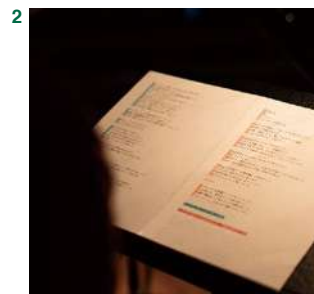
舞台補助：新井ひかる、佐野あき

テクニカル：東京芸術劇場 永田久美子、行方太一

運営・サポート：芸劇スタッフ/研修生計5名(田室寿見子、加藤惟、村上理恵、吉田舞雪/新井ひかる)、リサーチメンバー計7名(関根好香、王皎令、張藝逸、佐野あき、齋藤里咲、宍野凜々子、小山彩花)

記録：志鎌康平(写真)、河内彰(映像)、楊淳婷(参与観察)

協力：NPO法人Mother's Tree Japan



《公演までの流れ》

- ① 取材
↓
- ② 文字起こし
↓
- ③ 取材内容の振り返り、公演の構成に関するディスカッション
↓
- ④ 公演の台本の編集、読み上げ、ディスカッション
↓
- ⑤ 影絵人形の制作
↓
- ⑥ リハーサル
↓
- ⑦ 公演
↓
- ⑧ アフタートーク

日本に暮らしている外国人女性に 感覚的に共感できる素晴らしい機会

坪野谷 知美 さん

NPO法人Mother's Tree Japan

最初に芸術劇場からお声掛けをいただいた時は、外国人女性の子育て出産の話と影絵がどのように結びつくのかイメージができずにおりましたが、何度も打ち合わせを重ねる中で、これは面白いものができるという予感で期待が膨らんでいきました。

異国で自分たちの子育てを頑張っているのみならず、いつも笑顔で母国のお母さんたちをサポートしてくれている外国人ボランティアメンバーたちの、普段語られることのない素顔や日本に来るまでの心の軌跡、子育ての中で秘めている思いなどを、宮本先生のインタビューに同席させていただく中で伺い知ることができ、毎回涙が止まりませんでした。

それでも、1時間強に及ぶインタビューをどのように物語に落とすのか、

またそれをどのように影絵に落とすのかは当日までイメージができませんでした。当日は幻想的な効果音や歌声、そして美しいナレーションとともに素晴らしい影絵の世界が展開され、そこに場内の全ての人引き込まれていくのを感じました。

ご家族と一緒に来られたご本人たちも、とても感動していて参加して良かったと言っていました。

ご本人たちにとっては自分たちの人生の振り返り、そして私たちにとっては、日本に暮らしている外国人女性に感覚的に共感できる素晴らしい機会となり、後日あちこちでこのイベントが素晴らしかったと感想をいただきました。

この機会をいただきましたことに感謝を申し上げます。





続・掌編

舞台裏のつぶやき

参与観察としてこのプロジェクトに立ち会うようになった2022年の初夏、その完成形はまだ想像がつかなかった。制作のプロセスではあくまでリサーチャーとして振る舞うべきだとわきまえていたのだが、影絵について話す企画会議にしろ、影絵を作る現場にしろ、関わり合いの中で増幅していく関係者の能動的なパワーはとて多岐にわたる、思わず惹きつけられて気持ちが高揚する瞬間がとて多岐にわたる。しかしここではあえて冷静な目線から、舞台裏で起きたことを含めて今年度の事業について振り返ってみたい。

序文で述べたように、この事業に先立って2021年度は芸劇で人材育成事業、シアター・コーディネーター養成講座(多文化共生・基礎編)とアーティストの公開講座が行われた。当時芸劇が課題だと感じていたのは、人材育成は講座に止まらず、実践に踏み込むべきであること。そのため、今年度のリサーチ活動はシアター・コーディネーター養成講座の《実習編》とも位置付けられている。受講生のリサーチ参加は、劇場と地域コミュニティをつなげ、アートを通して多文化共生を促す担い手を育てる意図に基づいており、教育的な意義が強い。

受講生を中心としたリサーチメンバーは個人の努力で豊島区を調査して提案を行ったほか、企画段階で3つの掌編に対して意見を述べ、活動の現場ではサポーター、通訳やアーティストの助手などとして活躍していた。メンバーは実践的な学びに主体的に関わった者だと言えるが、それだけではない。メンバーの存在は、リサーチ活動における多声性を担保する上で重要な役割を果たしていた。例えば、掌編3の連携団体は、中国出身の王さんが自身の「外国人女性」という属性から関心を持つようになった対象である。また、掌編2における「おしゃべりタイム」では、サポーター各々の属性(職業、出身地、国籍、趣味嗜好などの違い)が「東京」に関する各グループの会話の幅を広げた要因だったのかもしれない。言い換えると、リサーチメンバーの属性がある程度多様であることゆえにプログラムが多方面で活性化されたようだ。

ここで補足したいのは、リサーチメンバーの一人、宍野さんを中心に編集された本事業の「ガイドライン」である。リサーチメンバーの意見を汲んで作られたガイドラインは、企画運営チーム内で共有され、さらに、一部の内容は掌編2のワークショップ実施前に参加者にメールで共有された。

東京芸術劇場 多文化共生に向けたアートプログラムは、参加する誰もが、出自や立場にかかわらず、尊重され安心して創造活動ができるよう、

ガイドラインを定めます。

(中略)

プログラムをより良くするために

● 東京芸術劇場 多文化共生に向けたアートプログラムでは、参加者、運営者全員の風通しの良い双方向のコミュニケーションを大事にしています。自分の立場（地位、年齢、性別、国籍等）が、周囲に与える影響に自覚的になり、適切に発言・行動してください。

● 「セーフ・スペース」（誰もが安心できる場）を全員で構築することが、より良い創作や交流に繋がるという認識の上に、参加者全員が自覚的に場作りをしていきましょう。

(後略)

(ガイドラインより抜粋)

多文化共生に向けたアートプログラムは、日本人と外国にルーツをもつ人、アーティストと地域で暮らす人など、普段の生活で交差することがない人々が邂逅する場である。多種多様な人がつながる場面では、上記のように発散的なアイデアやディスカッションが促される反面、意見の齟齬が生じることもある。この「ガイドライン」は、様々な属性を持つ人々が触れ合うことを前提とした多文化コミュニケーションの下支えとなり、こうして自明なものだとされていた心得が言語化されたことによって、多文化交流において心がけるべきことへの共通認識は本プログラムにおいて確固なものとなっていた。

続いて着目したいのは、出自の異なる人々を包容する社会の構築に向けて、本プログラムが外国人住民と地域の日本人の相互理解にどうはたらきかけたのかについてである。一般的に、掌編2の公開発表会と掌編3の公演で語られたストーリーは、留学生や子育て世代の外国人女性の私的なエピソードに過ぎず、普遍性のある事象ではないと思われるのかもしれない。とはいえ、芸劇が実施した観覧者アンケートでは「表現を通して他者の内面に触れることができる可能性を確認した」や「参加者一人ひとりの文化と個性が、影絵の躍動感と『影』という媒介物を通して、他者に共有されていく様子に心が動きました」という回答が見られた。つまり、語りを引き立てる影絵と音楽の実演が、出演者の思いを届ける力となり、聞かれざる声を聞かせることが可能であることが明らかとなっていた。

一方で、芸劇の外に出向いて行った掌編1では、予想外の展開があった。それは、子どもたちが会場付近でスケッチをしている姿を目撃した、豊島区区民ひろば南大塚で事務局を運営する委員からの声かけだった。委員によると、昔からイスラームの学校があることを知っていて、個人的になにか一緒に活動できないかと思っていたそうだ。ワークショップの日、お花を見ている子どもたちの様子を見て、「地域のおばちゃんた

ちと一緒に花壇にチューリップとか、植物を植える活動をしないか」とIISOの先生に提案していた。このささやかな出来事が示唆するのは、接触の機会に欠ける地域コミュニティをつなげるメディエーターとしてアートの活動が機能しうることではないだろうか。

今年度の実践を通じて、多文化共生に向けたアートプログラムにおいて、「影絵」という芸術表現を用いる必然性は少しずつ確認された。影遊びという純粋で楽しい感覚は、多くの人の心に刻まれている。それを喚起するには時間や手間はさほどかからない。芸術としての親しみやすさを秘めている影絵は、同時に、表現として多彩に展開できる柔軟性を持つ。掌編1では、植物というモチーフの制限があったが、それでもバラエティに富むモチーフが子どもたちの手によって作られた。モチーフが影になったときも、人形に負けない生命力と躍動感を持っていた。掌編2では変身前の出演者と、変身後の影絵のギャップから伝わってくる個々のメッセージ性が鮮明であった。また、4人のナラティブをもとに作られた掌編3は、朗読、影絵と音楽のライブパフォーマンスで構成され、映像作品と一味違うアクチュアリティのある表現となった。そのほか、影として出演することは、そのまま顔を曝け出して語ることより遥かに敷居が低い。実演への参加を促すことも影絵の利点として述べることができる。ワークショップや公演の現場で目の当たりにした影絵師の川村さんのカリスマ性も、影絵の魅力を大きく引き立てた要素だと言うべきであろう。

最後に、紙幅の都合上詳述することはできないが、本プログラムの企画段階において丁寧な調査や議論がされていたことについて述べたい。まず、日本ではあまり知られていないイスラーム文化について、モスクの運営事務局やIISOの先生たちの協力を得て事前調査を行ったことが挙げられる。そして、表舞台を見るだけでは分からないのは、掌編3の台本編集に注ぎ込まれたエネルギーである。台本の編集は企画会議にて、宮本さんと川村さん、リサーチメンバーや芸劇の研修生などの濃密なディスカッションを経て行われた。政治性の強いミャンマーのクーデターの話や技能実習生の話、日中関係の話などは入れるべきかどうか、本人の身の安全に影響を及ぼさないか。ただのストーリーの消費にならないには、どう演出するべきか。各国の文化や参加者の事情に合わせて配慮をどこまで工夫したのかが、多文化共生に向けたアートプログラムのクオリティを左右しているように思える。

影絵は多文化共生のメタファーと言えるのかもしれない。隣人の全貌は見えないが、その影や声に触れることから始まり、少しずつ理解を増やしていく。言葉の壁がある多文化交流の現場で、非言語的コミュニケーションを促進する「影絵」の手法が今後も役立っていくことを期待したい。





東京芸術劇場

多文化共生とアートに関するリサーチ (国内) 2022 レポート

「東京と変身」他、影絵掌編

主催

東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

※本事業は、クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョーの一環で実施しています。

執筆

楊淳婷 YANG, Chunting

台湾台北市生まれ。博士（学術）。東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科特任助教。立教大学社会学部兼任講師。自身の経験から移住や移民、社会とアートの関係性に関心を抱き、現在は国や文化の枠組みにとまらないインターセクショナルリティに注目している。

寄稿

池田奈緒子 NAO (インターナショナルイスラミーヤスクール大塚 (IISO))

香川陽子 (学校法人香川学園メロス言語学院)

坪野谷知美 (NPO 法人 Mother's Tree Japan)

写真

志鎌康平

デザイン

三上悠里, 大宮芳美

編集

東京芸術劇場

企画・発行

公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

〒171-0021 東京都豊島区西池袋 1-8-1

03-5391-2111 (代)

発行日

2023年6月1日発行

 **Creative Well-being Tokyo**
だれもが文化でつながるプロジェクト

東京芸術劇場

Tokyo Metropolitan Theatre

(C) Tokyo Metropolitan Theatre 2023

Printed in Japan

無断転載禁止



Tokyo Metropolitan Theatre 2022 REPORT

多文化共生と
アートに関するリサーチ(国内)
2022 レポート